

船団

第109号

特集

生誕300年の蕪村



池田 澄子

鍋の湯気などに日のやや伸びしかな
春炬燵あなたの脚が長すぎる
治らない厚着癖など春の風
花を見に来たわけでなし花から花
若そうな鶯お向かいのどこか
心配に椎の花の香濃くとどく
落梅を拾って嗅いで捨てて帰る

伊藤 五六歩

兄さんが古民家風の春休み
嫂ねえさんが古民家してる春落葉
古民家の広間横切るルンバかな
春しぐれ薄暮に架かる泪橋
春かなし前髪の先切り揃ふ
ものの芽やハローワークに十二使徒
ものみの塔何処より見える春の星

● 会員作品 ●

伊藤 ふみ

爐紅葉しのばす懐紙屋台酒
冬ざるる芭蕉生家の火消壺
ありがとうどういたしまして去年今年
ほくほくのやきいもにある存在感
春普請ブルー・ピンクのミキサー車
はんなりとやっぱりはんなり春の空
水温むいつも真赤な郵便車

井上 曜子

寒オリオン真下にいます迷い猫
角砂糖のひとつがとける雪もよい
冬型の気圧血圧火の用心
ひたひたとよそ見もせず
初御空橋の真ん中歩く人
老いの家ここは風花一丁目
空きらり春の割合二割五分

内田 美紗

サーカスの男火を噴くレノンの忌
七癖も七難も駕替へにけり
花枇杷や一軒おいて回覧板
電卓をゼ口に戻して葛湯吹く
日脚伸ぶ寺町囲むラブホテル
立春大吉目くばせのごと誤字一つ
ももいろの点滴つつつ春うごぐ

宇都宮 哲

鮮血を浴びて故郷の山眠る
母の母の母の母は雪おんな
留め金が裏返つてます冬の河馬
海鼠腸や今宵はちよつとカメレオン
節度ある鬼ばかりけり福は内
春遠し歩くゴリラの腰あたり
早春の別れを告げるロシア文字

● 会員作品 ●

乳原 孝

寒晴や紙に切られし傷ひとつ
煮ごごりの煮ごごりのまま捨てられし
湯豆腐や記憶のかけら丸くなり
廻りつつ元に戻らぬ寒卵
海も空も荒れて建国記念の日
春風や生涯通し既製服
教科書の春のにはひを開きけり

梅田 千種

去年今年とまりなさいその車
白菜のライフを可視化ふたつ割り
切りだせぬままにおでんのがんもどき
猫とわが体温点る寒の家
猫町に足をつつ込む梅三分
しら梅のつぼみドキドキ奈良の今
芽ぐむ音きこえるマイクあったなら

黒田 さつき

春隣筆先ぶわつと太らせて

三日月と金星の距離春隣

あなたから風邪をもらった春隣

ガリ勉も早弁もいて春隣

春隣アインシュタインから宿題

春隣計量スプーンの大中小

春隣天津甘栗ほうり込み

小枝 恵美子

海を見る十一月のでぶらの手

セーターの胸いきいきと口喧嘩

蒲団から続くトンネル月曜日

夕焼けて枯木は一步前に出る

綿毛布洗って干してパキスタン

風光る金券シヨップで買う切符

木の芽風鼻全開に滑り台

● 会員作品 ●

児玉 硝子

近松の今はスランプ夜の雪

クレープをかじりかじらせ春隣

一礼して退散福は内にあり

早春の港いろはに帆を上げて

梅三分橋の名つづくこの路線

梅咲いて血小板がくっついて

ゲームする横顔は夜叉春灯し

後藤 雅文

十二月八日出窓に哺乳瓶

時々舌をからませペチカの火

金平糖のような朝月を野水仙

サッシ屋に猫の入り口鬼やらい

曙に負けない力冬の魚

山小屋の氷柱は太り良く眠る

水鼻の野良抱き上げている背中

津波 古江津

ひるすぎの本をくくれば草の絮
秋薄日おなじ男がまた来たわ
はつふゆの映画に雨の降る日かな
冬のとんぼ三年乾して薪にする
順路からはずれて紅さざんか咲いた
テールにももの散らかして寒に入る
とら猫とのらくら我の日脚伸びる

坪内 稔典

うつつふふ苺を雪が包む夜
春浅くみんなで運ぶ木のベンチ
伊予柑は指立ててむく父も子も
酒のんで漂流物になって春
ぼつねんと酔うか山々かすんでる
水ぬるむカバにはカバが寄り添って
空は春犬も魚も鰯あびて

● 会員作品 ●

鶴濱 節子

寒波来るずんずんと来る妊婦来る
タンゴタンゴ斜めに冬の大三角
老人がつかずはなれず日向ぼこ
うっかりと水鳥になりまあいいか
雪の朝お猿がころぶコロンプス
早春の羽音窓辺の昼下り
友情がさらりと歩く梅二月

寺田 伸一

ムーミンとお手々繫げば初茜
ターザンや俺には俺の初日の出
初空の地球もオツでしょ？ガガーリン
楊貴妃の初湯を覗くの僕じゃない
夢のよな初夢みようよカボチャでさ
初詣みんなで乗るのは偉人伝
初句会冥土の呉春は誰の酒？

寺田 良治

ロールケーキの二月始めのそんな弾力
鸚鵡貝その冬眠のいつまでぞ
石だらけの二月の川は痛い痛い
いじめないで焚火の種が怒りだす
牡丹雪たちまち遺跡の遊園地
ボヤという子猫のなまえ隴月
モダンアートね春の小雨の傘の骨

田 彰子

ふと旅に出たくなる日の百合鷗
鬼太郎の赤い留金冬の月
鬼太郎の屋根から屋根へ冬の月
ソックスにひっかかる指去年今年
新年へこぎ出している三輪車
コシのある鑑鈍あなたとはや三日
象動くたびに現れ仏の座

● 会員作品 ●

遠野 あきこ

病得て長き夜わたる椀の舟
秋の空きらきら星の歌遠し
さつま芋ほくほくほくと頬ゆるむ
朝寒も喜びおりし退院日
白梅の日かげにあるもひらきゆく
羽づくろい相合す鳩のひなたぼこ
まなかいに十葉ありて道半ば

鳥居 真里子

冬枯れの右手に鳥のきてしづか
貨車にかざはな宙吊りのひるの月
雪の日の小石ひとつは雪ふる詩
舌の根の隙間すきまを椿かな
すみれ野に淡きのりしろあり伸びる
菌殺す青き液体春よ春
陽炎のぱつと咲いてはかぶさり来

長沼 佐智

一人起き何故かみな起き年新た
パタンパタン枯葉の果ての高英男
春霰セブンイレブン素通りす
ハンカチーフ四角に畳定位置に
石段の石山寺の秋桜
淡雪は地上に人は地下鉄に
雪隠の松寒鯉の鮮やかに

中林 明美

マフラーをくるっと目が合う知らぬ人
冬の晴れちよつと足台押さえてて
飛び石の冬日に一寸蹟いた
初霜も無い立冬のずんべらぼう
若冲のにわとり来てる二月かな
山眠る配電盤の大理石
梅一分シヤドーボクシングの男

● 会員作品 ●

中原 幸子

新玉のことしの踵ごっしごし
腹時計狂うてうまし七日粥
竜の玉わたしの中を水がゆく
水買うて遠くの山の芽吹き色
空は春掘り出しもののように兄
鳥帰りゆくかトーストこんがり
割れものよ割れようぐいす餅よ鳴け

南北 佳昭

月天心飛鳥に残る石舞台
反抗期の君は海鼠か鮫鱈か
立ち呑みの玻璃戸に覗く赤ブーツ
串一本くわえ重機に寒鴉
梅開く今日はごめんと言えそう
梅三分たま駅長の感謝状
喜寿傘寿それがどうした桃の花

原 ゆき

白米を水に眠らせ冬の月
おとといの感激きよしの葛湯かな
雪空に送電線のしきりなる
立子忌の膝に直線裁ちの布
ふるふると袋ひらきぬひなあられ
伯母上のメールはるると春の月
アネモネになりたがる手は閉じておく

阪野 基道

朝霧の匂う少年名はシスター
まばたいて雪に紛れて雪女
起き上がり小法師が散って冬銀河
留守電に棲みつく春の老夫婦
いつまでも伸びしろ待ってる亀鳴かそ
日向ぼこ「hoooi」とくあく笠智衆
啓蟄や今朝から声がむず痒い

● 会員作品 ●

東 英幸

シュレツダー終れば静か柿熟す
白秋の光の中の水の粒
ホツチキス調子でてきて冬うらら
時雨忌のうどんに落とす生卵
鉄板の錆び始め十二月八日未明
七草の一つ一つが湯気となる
大門や地獄にもあるお正月

火箱 ひろ

冬苺こんなところにいる自由
十二月この世に青く非常口
老人の影を飛び立つ冬鷗
海原の鯨が歌をうたう朝
座礁した鯨はなにを夢見たか
冬青空青があふれて心字池
猫がほどける冬がほどける母の家

陽山 道子

山盛りの泡で洗顔冬銀河
小雪舞う新体操の少女たち
裸木のぐーんと根っこ空へ空
冬うらら坂の途申にある暮らし
おりおりに触れて叩いて二月の樹
春ぎざす男ばかりのイノダカフェ
春の日の大阪梅田鳥轍凶

平井 奇散人

空間の歪を避ける黄金虫
石碑の苦役千年早畑
トタン屋根バツハのフーガかき氷
抽出しに大人忍ばす夏休み
夏向きの生活続く次男坊
廃舟の艦に泡立つ夏の海
紙芝居帰った路地に灯取虫

● 会員作品 ●

平川 陽三

十二月いつも後ろに鬼がゐる
上手より音痴のうける年忘れ
安物とあなどるなかれ鯨大根
四日はや君と貼りあふサロンパス
朝餉とる君の真顔に松すぎぬ
子持鱈小鍋立てするとも白髪
戦なきことを待みて鸞替へる

平林ひろこ

紫木蓮玉三郎は眉を描く
坂道にカレー屋二軒朴の花
道成寺舞ひし扇に薄き黴
雷鳴を総身で受くる茅渟の海
丁寧に捨て身になつてゆく初秋
白鳳の仏の前の酔芙蓉
夜長しベーカー街に馬車の音